大鏡『競べ弓』定期テスト対策問題　解答・解説

■ 解答・解説

問1 驚いたのは**中の関白殿（藤原道隆）**。弓の会は息子の伊周（帥殿）の主催であり、まさか叔父にあたる道長が来るとは思っていなかったのに、その道長が突然やって来たので、「意外だ（あやし）」と驚いたのである。

問2 **イ（不思議だ・意外だ）**。「あやし」は「不思議だ・妙だ・意外だ」の意。来るはずのない道長が突然やって来たので、中関白殿（道隆）が「意外だ」と驚いた場面。「みすぼらしい」「身分が低い」の意味もある語だが、ここは文脈から「意外だ」が正解。

問3 （傍線部②について）

問4 （解答例）道長は、官位の上では伊周より下（下臈）であったが、道隆から見れば弟であり、また将来を期待される人物でもあった。そこで道隆は道長を立てて、上座に当たる「前」に立たせ、先に射させて敬意を示した（場をなごやかに進めようとした）と考えられる。

問5 （解答例）弓の勝負で、伊周（帥殿）の当たった矢の数が、道長より**あと二本少なくなってしまった**（二本分負けている）状態。つまり伊周が劣勢になっていることを表す。

問6 （傍線部③について）

問7 （傍線部④について）

問8 ⑤「臆し給ひて」の主語は**帥殿（藤原伊周）**。⑥「入道殿射給ふ」の主語は**入道殿（藤原道長）**。気おくれして的をはずしたのが伊周、堂々と射当てたのが道長、と対比されている。

問9 （解答例）伊周は、手も震えてしまったせいか、矢が的の近くにさえ寄らず、まったく見当はずれの方向へ飛んでいってしまった様子。「無辺世界を射る」とは、的をはるかに外れて、あらぬ方向（とんでもないところ）へ矢を射てしまうこと。

問10 （解答例）主催者である息子・伊周が気おくれして矢を大きく外したうえ、叔父の道長が自信たっぷりに言い放った通り堂々と的を射抜き、その場の空気が完全に道長に傾いてしまったから。父である関白殿（道隆）は、わが子の不振と気まずい状況に青ざめたのである。

問11 道長はのちに**出家して入道（仏門に入った人）となった**ため、「入道殿」と呼ばれる。『大鏡』が書かれた時点から振り返って、晩年の呼び名で語られている。

問12 （訳例）「**（私が）摂政・関白になるはずのものであるならば、この矢よ当たれ。**」 道長が二度目に放った、自分の出世を矢に賭けた言葉。

問13 （解答例）道長が「自分の家から帝・后が立つなら当たれ」「摂政・関白になるはずなら当たれ」と言い放ち、その通りに二度とも的の中心を射抜いてしまったため。招いた側の伊周は気おくれして矢を外し、道長の自信と将来の栄華を暗示する発言・的中ぶりに、その場の人々はしらけ、もてなしの興ざめとなった。

問14 （父大臣のことばについて）

問15 （三人について）

問16 （解答例）伊周（帥殿）は、気おくれして手を震わせ、的を大きく外してしまう**気弱で見劣りする姿**として描かれる。一方、道長（入道殿）は、その場の空気にも臆せず、自家の繁栄や自分の出世を堂々と宣言し、言葉どおり二度とも的の中心を射抜く**自信に満ちた豪胆な姿**として描かれる。両者は対照的に描き分けられている。

問17 イ（自信に満ち、豪胆で動じない）。場の空気に臆することなく、自分の家の将来の繁栄を堂々と宣言し、しかも有言実行で的を射抜く――若き道長の豪胆さ・大胆不敵さが描かれている。

問18 A＝**道長**　B＝**歴史**　C＝**紀伝**。『大鏡』は藤原道長の栄華を中心に描いた歴史物語で、帝王の年代記（本紀）と臣下の伝記（列伝）を組み合わせる紀伝体の形式をとる。

問19 （四鏡について）

問20 （解答例）「紀伝体」とは、帝王ごとの年代記である「**本紀**」と、臣下など個々の人物の伝記である「**列伝**」を組み合わせて歴史を記す書き方。もともと中国の歴史書（『史記』など）の形式で、『大鏡』もこれにならって、帝の代々と藤原氏の人々の伝記を連ねて道長の栄華を描いている。